

# 小学校音楽科におけるわらべうた教材を用いた読譜教育 －《ひらいたひらいた》を例に

Education in score reading through nursery songs in elementary schools:  
an example of “Hiraitahiraita”

次世代教育学部こども発達学科  
室町さやか

MUROMACHI, Sayaka

Department of Child Development

Faculty of Education for Future Generations

キーワード：音楽教育，読譜教育，コダーイ，ソルフェージュ，わらべうた

**Abstract** : These days, there are guidelines in place regarding how to teach students musical notes, rests and terminology for elementary school music classes. If children were to acquire such knowledge at the elementary level, many people would have the ability to read musical scores. However, the present situation in Japan shows that, in many cases, the notes, rests and musical terminology are not adequately learned in childhood. This paper addresses the following: 1) The ability of students who study in the elementary education teacher training courses at the private University in Okayama Prefecture is examined and the necessity for the teaching score reading to university students is pointed out, and 2) the Japanese nursery song “Hiraitahiraita” is analyzed from the point of view of the teaching guidelines for music. “Hiraitahiraita” is a song from the late Edo period, and the song involves a simple game for children. This study argues for a method of instruction for musical terminology with reference to the Kodály method, one of the focuses of which is using traditional nursery songs for musical education.

**Keywords** : education of music, education of score reading, Kodály, solfege, nursery songs

## 1. はじめに

「字を読むことのできない人が、ある種の知識や文字で書かれた文化財を理解できると思いますか？同様に音楽知識は、楽譜が読めないと理解することはできません。」とは、ハンガリーの音楽教育学者コダーイの言葉である（中川，1988，pp.164-165.）。現在日本の小学校学習指導要領の「第2 各学年の目標及び内容」では、低学年から高学年を通じて読譜に関わる事項の指導について「身近な音符，休符，記号や音楽にかかわる用語について，音楽活動を通して理解すること。」と明記されている。「第3 指導計画と内容の取り扱い」では，小学校音楽科で取り扱う「音符，休符，音楽にかかわる用語」が「児童の学習状況を考慮して，次に示すものを取り扱うこと。」として具体的に示されており，37の音符や休符が挙げられている。これらは楽譜を構成する多様な音符，休符，楽典用語

の一部であるが，少なくともここで示されている楽典事項を学習すれば平易な楽譜を読み書きし，楽譜を見て歌唱したり演奏したりするためには十分な内容となっている。しかしながら後述する2. で明らかにした通り，小学校教員養成課程に籍を置く学生であっても読譜力が身に着いておらず，小学校音楽科の授業においてこれらの楽典事項が十分に指導されているとは言いがたい現状である。

小学校音楽科において読譜教育が不足している原因のひとつとして，音符や休符は「児童の学習状況を考慮して取り扱う」とされており，いつの時点でどの教材でどの楽典事項を指導すべきであるかという点が教師にとって分かり難いことが挙げられる。本研究では小学校の音楽科の共通教材のうち，1年生の《ひらいたひらいた》を取り上げ，楽曲を構成する楽典的要素とその指導法について論じた。同楽曲は江戸時代より遊び歌として親しまれてきた楽曲であり，短く平易な

旋律とリズムは子どもたちにとって馴染みのあるものである。小学校音楽科の授業においてわらべうたを教材とした読譜教育について考察し、日本の小学校音楽科における読譜教育に寄与することが本研究の目的である。

## 2. 小学校教員養成課程における読譜力の現状

### 2-1) 調査方法

小学校教員養成課程における読譜力の現状を明らかにするため、本研究では岡山県の私立K大学の小学校教員養成課程に在籍する学生を対象に「音符、休符、記号や音楽にかかわる用語」についてのアンケート調査を行った。アンケートは2014年9月24日の「音楽科教育法」講義の第一回目に実施し、小学校学習指導要領において音楽の授業で扱われるべき音符、休符、記号や音楽にかかわる用語の一部について「名前と意味を正しく理解しており、歌ったり演奏したりできるか。」という問いを設けた。これらの問いに対して「A.できる」「B.まあまあできる」「C.できない」の三択から回答を用意し、学生が自分の読譜力についてどのように認識しているかを調査した。学生の多くは2年生であり、同大学において1年時に開講される楽典を含む音楽理論についての講義およびピアノ実技に関する講義は必修ではなく選択科目である。

### 2-2) 結果と考察

本調査からは以下の結果が得られた。小学校音楽科の教科書にもっとも表れる機会の多い音部記号であるト音記号に関しては43%の学生が「できる」と回答しているが、次に頻出するヘ音記号について「できる」と回答した学生は33%と両者の間には10%の開きがみられる。拍子記号に関しては、4分の2拍子、4分の3拍子、4分の4拍子と4分音符を1拍と数える単純拍子についての回答ではそれぞれ29%、29%、31%の学生が自身が理解できていると認識しているが、複合拍子である8分の6拍子では「できる」と回答した学生は26%に留まっており、47%の学生が「できない」と回答している。音符の中で60%の学生が「できない」と回答しているのがくくられた付点8分音符と16分音符についてであり、「できる」と答えた学生は19%であった。この数字は付点8分音符単体についての質問では「できる」と答えた学生が43%、16分音符単体についての質問では「できる」と答えた学生が36%であることを考えると矛盾のある結果であり、

じっさいにこれらの音符を「できる」と回答している学生が正確にこれらの音符と音価を理解していない可能性が考えられる。調査の中で「できない」という回答をもっとも多く得たのは、速度表示とナチュラル記号であり、66%の学生がこれらの記号を理解していないことがわかった。低学年の教材から使用される繰り返し記号についても「できる」と答えた学生は23~25%であり、繰り返し記号について理解していると認識している学生が少ないことが判明した。全体の平均では、これらの音符、休符、音楽にかかわる用語について「できる」と回答した学生が33%、「まあまあできる」と回答した学生が24%、「できない」と回答した学生が40%であった。

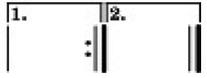
これらの結果により、小学校教員養成課程に在籍する学生の多くが小学校音楽の授業で取り扱うべき楽典事項を理解していると認識してはならず、十分な読譜力を持っていないことが明らかとなった。これは学生本人の学力の問題というよりも、むしろこれまでに適切な読譜教育を受けてこなかったことが問題となっていることが考えられる。もし学生たちが学習指導要領で定められた「音符、休符、音楽にかかわる用語」を小学校教育の中で学習していたのならば、本調査の結果も大きく変化した可能性が見込まれるのである。小学校音楽科の授業において「音符、休符、音楽にかかわる用語」が適切に行われるためには、まず教員が児童に教えるに足る楽典知識を持っていることを求められることは論を待たず、本調査の結果は現在の日本の読譜教育の現状の一端を明らかにすると同時に、小学校教員養成課程における楽典教育の必要性をも提言するものである。

また本調査については、以下の二点の問題が挙げられる。ひとつめは音楽科学習指導要領「第3 指導計画と内容の取り扱い」で示されている音符、休符、記号や音楽にかかわる用語のうち、一部の事項についての結果がないことである。アンケート実施時には表1には取り上げられていない記号などについての質問も存在していたが、たとえばタイやスラーのように音楽初心者にとっては見た目で判断がつきにくい記号など、何を問われているかが被質問者にとって分かり難い質問となったため本論文で発表することは差し控えた。

ふたつめは回答の正確さの問題である。今回のアンケートでは「A.わかる」「B.まあまあわかる」「C.わからない」の三つの選択肢から回答を選び、学生が自分の読譜力をどのように認識しているかを調査したが、

表1 小学校教員養成課程における学生の読譜能力に関する調査（有効回答数136, 0.1%未満は切り捨て）

音符、休符、 音楽にかかわる記号	A.わかる	B.まあまあ わかる	C.わからない	無回答
	59 (43.3%)	44 (32.3%)	31 (22.7%)	2 (1.4%)
	45 (33%)	40 (29.4%)	50 (36.7%)	1 (0.7%)
$\frac{2}{4}$	40 (29.4%)	43 (31.6%)	52 (38.2%)	1 (0.7%)
$\frac{3}{4}$	40 (29.4%)	40 (29.4%)	55 (40.4%)	1 (0.7%)
$\frac{4}{4}$	43 (31.6%)	43 (31.6%)	49 (36%)	1 (0.7%)
$\frac{6}{8}$	36 (26.4%)	34 (25%)	65 (47.7%)	1 (0.7%)
	62 (45.5%)	33 (24.2%)	41 (30.1%)	0 (0%)
	44 (32.3%)	35 (25.7%)	56 (42.4%)	1 (0.7%)
	46 (34.8%)	33 (24.2%)	56 (42.4%)	1 (0.7%)
	56 (42.4%)	44 (32.3%)	36 (26.4%)	0 (0%)
	54 (39.7%)	42 (30.8%)	40 (29.4%)	0 (0%)
	38 (27.9%)	49 (36%)	49 (36%)	0 (0%)
	50 (36.7%)	40 (29.4%)	45 (33%)	1 (0.7%)
	32 (23.5%)	44 (32.3%)	59 (43.3%)	1 (0.7%)
	26 (19.1%)	27 (19.8%)	82 (60.2%)	1 (0.7%)

	33 (24.2%)	38 (27.9%)	64 (47%)	1 (0.7%)
	45 (33%)	35 (25.7%)	55 (40.4%)	1 (0.7%)
	28 (20.5%)	16 (11.7%)	91 (66.9%)	1 (0.7%)
	32 (23.5%)	15 (11%)	89 (65.4%)	0 (0%)
	35 (25.7%)	16 (11.7%)	85 (62.5%)	0 (0%)
<i><b>f</b></i>	76 (55.8%)	25 (18.3%)	35 (25.7%)	0 (0%)
<i><b>p</b></i>	59 (43.3%)	28 (20.5%)	49 (36%)	0 (0%)
	56 (42.4%)	36 (26.4%)	44 (32.3%)	0 (0%)
	53 (38.9%)	31 (22.7%)	52 (38.2%)	0 (0%)
	27 (19.8%)	18 (13.2%)	91 (66.9%)	0 (0%)
	63 (46.3%)	34 (25%)	39 (28.6%)	0 (0%)
	63 (46.3%)	34 (25%)	39 (28.6%)	0 (0%)

譜例 1 《ひらいたひらいた》

♩ = 54~58



The musical score consists of three staves of music in 2/4 time. The first staff begins with a treble clef and a key signature of one sharp (F#). The melody is composed of eighth and quarter notes, with some rests. The second staff continues the melody, ending with a fermata and a 'v' marking above the final note. The third staff shows a continuation of the melody with a fermata at the end.

学生本人が「わかる」と回答してもそれが事実かどうかを客観的に判断することはできない。今後は上記二点の問題を考慮し、小学校教員養成課程に在籍する学生の読譜力をより正確に調査することを視野に入れている。

### 3. わらべうた教材を利用した読譜教育の可能性

わらべうたをソルフェージュ教育に利用した例として広く知れ渡っているのが20世紀ハンガリーの教育学者コダーイ・ゾルターンが提唱したいわゆるコダーイ・メソッドと呼ばれる教育法である。コダーイはハンガリーの保母や教師たちの音楽能力が低いこと、読譜教育が小学校のうちから繰り返し行われているのにも関わらず大学生に至っても楽譜を読める者が少ないことを憂慮し、すべての者が音楽の読み書き能力を身に着けること、「音楽的文盲をなくすこと」を掲げて音楽教育に尽力した。コダーイの音楽教育法の特徴としては、(1)歌唱の重視、(2)ソルフェージュ教育の重視、(3)わらべうたや民謡などを中心とした教材、(4)五音音階による教育、などである(室町, 2013, pp.47-49)。

現在のハンガリーの一般小学校1年生(6歳)の音楽教育カリキュラムにおいても遊びをともなうわらべうた教材を多く取り入れ、習得すべき学習内容としてリズム、旋律、楽譜、調などの具体的な事項が挙げられている(三村, 吉富, 北野, 2008, pp.5-9)。これらのうち、日本の学習指導要領で定められている音符、休符、記号や音楽にかかわる用語と共通するものは、4分音符、休符、くくった8分音符、小節線、終止線、繰り返し記号である。またハンガリーのカリキュラムでは「五線譜の理解」が定められているが、1年生の段階では図や絵を用いたり、簡単な音符を書かせたりして子どもの発達に配慮しつつ音楽の読み書き能力についても具体的な指導を行っている(清川,

2004, pp.113-114)。またカリキュラムの中では、ハンドサインを用いて音の高低を表したり、リズムを叩いたり、歌いながら遊ぶといった活動も重視されている。これらの活動を行うことで、子どもたちは音程、リズム、拍、テンポなどの音楽を構成する要素を体を動かしながら体得することができるのである<sup>1)</sup>。

本研究では前述のコダーイの教育法に鑑みて、小学校共通教材のうち《ひらいたひらいた》を取り上げ、「音符、休符、音楽にかかわる用語」の指導について考察した。同教材を論じた理由は、小学校音楽科で必ず指導される共通教材であること、遊びをともなう体を動かしながら音楽を構成する諸要素を学習することが可能な教材であるためである。なお《ひらいたひらいた》は1年生の共通教材であるが、本研究は必ずしも同曲に含まれる「音符、休符、音楽にかかわる用語」のすべてを1年生の段階で教えるべきであると主張するものではない。日本の小学1年生の場合、ピアノなどの習い事をしていない限りは教科書に掲載されている楽譜を見て歌うことそのものが初めての経験であり、音楽の授業の最初の段階で扱われる《ひらいたひらいた》の楽典事項を五線譜上で指導することに対して適切であるという判断を下すことはできない。同楽曲を用いた楽典指導は上の学年に進んでからでも可能であり、楽典事項の指導は子どもの発達や学習状況を考慮して行うことが必要とされる。譜例1は《ひらいたひらいた》の楽譜である。12小節の楽曲であり、構成音はミ、ソ、ラ、シの四つである。速度記号や発想記号などは各教科書によって相違があるが、本研究では2. でアンケート調査を行った岡山県で使用されている教育芸術社の教科書に準拠して譜例を作成した。この楽曲に使用されている音符、休符、音楽にかかわる用語のうち、学習指導要領での取り扱いを定められたものをまとめたのが表2である。

《ひらいたひらいた》は短い楽曲ではあるが、その中に様々な楽典要素が含有されている。「ブレス、

表2 《ひらいたひらいた》における音符、休符、音楽にかかわる用語

	五線				
7		$\frac{2}{4}$	$\text{♩} = 96$		
			速度表示	ブレス	スラー

「スラー」は初心者にも比較的理解しやすいことが考えられ、歌唱活動を通じて身に着けることが可能である。五線、ト音記号は音の高さに関わる事項であるが、小学校一年生の学習段階では最初から五線を用いて音高を身に着けさせるのではなく、ハンドサインやボディサインをしながら歌うなど、音高を体得的に習得した後に五線を指導するべきであると考えられる。低学年の音楽の教科書では五線ではなく二線、三線の線譜の中に階名を書いた丸などで音符を表す簡略化された楽譜も用いられており、段階を踏んで五線譜、音高の学習を行うことが望ましい。

拍子に関しては、遊びをともなった指導が可能である。《ひらいたひらいた》は子どもたちが手を繋いで円を作って遊ぶ輪遊びであり、拍に合わせて歩いたり、「いつのまにかつぼんだ」の歌詞に合わせて円の中心に集まる遊び方が広く行われている。ハンドサインやボディサインで音高を身体の動きとともに指導するように、歌に合わせて一小節につき二歩歩くなどの方法で自然に拍感を身に着けさせた後、子どもの学習状況によって四分の二拍子が一小節に四分音符を一拍とした二拍の拍子であることを教えることが可能である。

音符、休符は六種類のもので登場する。コダーイの教育法では子どもに音符のリズムを教える際、エミール・ヨセフ・シュベが考案したリズム呼称を採用しており（フォライ、セーニ、1975、pp.55-56.）、表3はその一例である。リズムの習得のためのリズム打ちは日本の音楽教育においても広く行われている指導法であるが、ハンガリーではリズム打ちに加えてこれらの呼称を用いたリズム唱を行い、音符と音価の関係が明確になるよう指導している。日本でも四分音符を「タン」、四分休符を「ウン」などと読みリズム呼称を用いた指導法が教科書や指導書に取り上げられているが、その他の音符や休符の呼称については一般的に統一されておらず、多様な音符に対応しきれてはいない。シュベのリズム呼称のように、各音符やシンコペーションのように類出する組み合わせのリズムに対応したリズム呼称が日本の音楽教育においても必要と

されていることが考えられる。

#### 4. まとめ

本研究では大学の教員養成過程で学ぶ学生たちの読譜力の現状について明らかにし、1年生の共通教材《ひらいたひらいた》の楽曲を構成する楽典要素のうち、学習指導要領において取り扱うべきであると定められた音符、休符、音楽にかかわる用語に注目し、その指導法について考察した。本研究により、教育養成過程に所属する学生に小学校音楽科で取り扱う楽典の知識が十分にあるとはいえないこと、子どもたちに馴染みのある遊び歌である《ひらいたひらいた》を教材とした場合に可能である楽典事項が明らかとなった。今後は教員を志す学生たちの読譜力を詳細に調査し、音符、休符、音楽にかかわる用語の指導法の研究を進めていきたい。

- 1) 身体活動と音楽の関連については日本においても数々の研究が発表されているが、高御堂（2011）では、幼少期に歌や動きをともなった遊びを積極的に経験した者とリズム読譜能力の関連について論じている。

#### 【引用・参考文献】

柏瀬愛子（1987）、コダーイの音楽教育思想とソルフェージュ教育、名古屋女子大学紀要、33、pp.187-197.

清川美也子（2004）、ハンガリーの音楽教育X I コダーイの音楽教育の実録（6才～9才）－小学校1・2・3年（1983年ブタペストに於いて）、青山学院大学教育学会紀要、48、pp.109-131.

カタリン、セーニ（1975）、コダーイ・システムとは何か、全音楽譜出版社、羽仁協子、谷本一之、中川弘一郎訳。

志澤彰（2003）、ハンガリーの「音楽小学校」の音楽教育－日本・オーストリア・ドイツの音楽教育と比較して－、国士舘大学文学部人文学会紀要、34、

表3 シュベのリズム呼称の例

♪	♪	♪	♪.	♪
ターアー	ター	ティ	ターイ	スン

pp.59-73.

高須裕美 (2013), コダーイアプローチを基礎にした音楽教育：長期授業計画の概要, 名古屋短期大学研究紀要, 51, pp.107-114.

高御堂愛子 (2011), 保育者・小学校教諭を目指す学生の読譜力とリズム感について：東海学園大学人文学部発達教育科第2期生の実態調査より, 東海学園大学研究紀要, 16, pp.131-147.

中川弘一郎編・訳 (1980), 「コダーイ・ゾルターンの教育思想と実践」, 全音楽譜出版社.

三村真弓, 吉富攻修, 北野幸子 (2008), ハンガリーにおける保幼小連携音楽カリキュラム：就学前教育から小学校1年生への系統性に着目して, 音楽文化教育学研究紀要, 20, pp.1-12.

室町さやか (2013), 幼児教育におけるわらべうたの意義と指導法～コダーイ・メソッドに鑑みて～, 千葉経済大学短期大学部研究紀要, 9, pp.45-54.

文部科学省 (2008) 小学校学習指導要領解説音楽編, 教育芸術社.